

ベレックのリスト

酒詰治男

実のところわたしは「物語」にはもうあまり期待しておらず、もっと広範にものを見る必要があったし、今もそうであるように思うのです。

——モーリス・ナドーへの手紙——⁽¹⁾

ホノルルのヒロ・ホテル、グラナダのカルモナ荘、アルヘシラスのテバ・ホテル、ジブラルタルのペニンスラ・ホテル、大型客船イル＝ド＝フランス号、レジス・ホテル、メキシコ連邦特別行政区のカナダ・ホテル、ニューヨークのアスター・ホテル、ロサンゼルス・タウンハウス、大型客船ペンシルベニア号、アカプルコのミラドル・ホテル、メキシコ航空会社等々……

あるいはまた、

アルザスものではリースリング、トラミネル、ピノ・ノワール、トカイ、ボルドーの赤ではメドックものがシャトー＝ド＝ラペイユ＝スキネル、シャトー＝ランシュ＝パージュ、シャトー＝パルメル、シャトー＝ブラヌ＝カントナック、シャトー＝グリユオー＝ラ＝ローズ、グラヴものではシャトー＝ラ＝ギャルド＝マルティヤック、シャトー＝ラリヴェ＝オー＝プリオン、サン＝テミリオンではシャトー＝ラ＝トゥール＝ボー＝シット、シャトー＝カノン、シャトー＝ラ＝ガフェリエール、シャトー＝トロットヴィエイユ……

さらにまた、

クロー族のホワイト＝マン＝ランズ＝ヒムとレイン＝イン＝ザ＝フェイス、モホーク族のルッキング・グラス、イエyson、アリカット、パイウト族のチーフ・ウイネマッカとアウレイ＝ジ＝アロウ、カイエワ族のブラック・ビーバーとホワイト・ホース、アパッチの大酋長コーチース、チリカウ族のジェロニモとカ＝エ＝テン＝ア、シャイアン族のスリーピング・ラビットとレフト・ハンドとダル・ナイフ……

以上はいずれも、完成までに10年を要したというジョルジュ・ベレック

(1936～1982)の小説(romans)『人生使用法』(1978年)の処々に姿を見せる網羅・羅列・列挙——いわゆるリスト——の典型例である。初めのものはホテルのラベル(第8章)、二つ目は葡萄酒(第33章)、三つ目はインディアン馬覆い(第90章)と、いずれもたまたま作中人物の収集品に関わっているが、しかしこの小説に姿を見せるリストはこのような範疇に限られるものではない。それどころか多くの章の全体、あるいはほとんど全体

がリストのみで構成されてもいる。第20章では工具会社の製品カタログが内容の大半を占め、第68章と第94章ではこの作品の舞台となっている大型建築物の階段でみつかった遺失物が枚挙されるばかりであり、第74章では同じ建築物の地下に想像される都市の事象が延々と列挙される。「付録」として巻末に付された最も大規模なもうひとつのリストである「索引」、さらに「年表」、「作中で語られたいくつかの物語の回想」などのいわゆる周辺テキストは考慮に入れずとも、他にも部分的、あるいは小規模なリストの例はまさに枚挙に暇がない。パリ市中に設定された集合住宅に観察される人物・事物を網羅しようというのがこの小説の目論見である以上、このような事態は当然のことではあるのだが。

もちろん、リストの上のような大々的な採用が作家の意識する技法であることは、『使用法』執筆も大方煮詰まった時点での作家自身の次のような主張からしても明かである。

(リストを作るほど簡単なことはないように見えるが、実のところ見かけよりずっと複雑なものだ。いつもなにかを忘れてしまうし、等々と書きたくなってしまう。だが目録とはまさに等々と書かないときのものだ。現代のエクリチュールはいくつかの稀な例外(ピュートル)を除いて、枚挙の技法を忘れてしまっている。たとえばラプレーのリスト、『海底二万海里』の魚のリンネ的列挙、『グラント船長の子供たち』におけるオーストラリアを探検した地理学者たちの枚挙……)⁽²⁾

しかし翻って見るに、作家の網羅癖はなにも『使用法』に始まったことではない。時期によって性質、規模に多少の差があるとはいえ、ベレックの作品のほとんどがなんらかのかたちでリストを備えており、また多くの場合まさにリストのみによって成立していてもいる。それらをつぶさに眺めてみると、『使用法』における枚挙は、種々の修練を経た作家のリストの技法の到達点であるとともに集大成にほかならないことがわかるだろう。以下は作品の年代順にこの側面の変遷を辿りつつ、この作家にとってのリストの意味を探ろうとするものである。

*

実質的な処女作『物の時代』(65年)のテキストに横溢するのは、原題

Les choses が示唆するように、大衆消費社会の出現に翻弄される若いカップルの所有欲の対象である事物の網羅である。たとえば二人の理想の居室の描写をもっぱらとする冒頭の章——動詞が仮想を表す条件法に限られている——の数ページは次のような室内装飾の羅列に埋めつくされている。

……左手のアルコールびたいなところには、くたびれた黒革の大きなソファァーが、そしてその両脇には、乱雑に本の積み上げられた薄色の桜の本箱が置かれているだろう。ソファァーの上には、壁幅いっぱい古い海図が貼られ、背の低い小さなテーブルの向こうの壁には、回教徒の祈祷用の絹の膝敷が掛かっているだろう。入口の革のカーテンと対をなしているこの膝敷は、三個所を頭でっかちの銅釘でとめてあり、その下にはさきほどのソファァーと直角に、もう一つの薄茶のビロードのソファァーが、その横には長い脚のついた飾り^{めづ}筆箆が置かれているだろう。筆箆は赤褐色の漆塗りで、三段の飾り棚には瑪瑙細工、卵形の小石、嗅ぎタバコ・ケース、ボンボン入れ、硬玉の灰皿、真珠貝、銀の懐中時計、カット・グラス、ピラミッド形的水晶、楕円形の額縁に入ったミニアチュールといったこまごました飾り物が並べ立ててあるだろう……（9～10ページ）

カフカのグレーゴル・ザムザとメルヴィルの代書人バートルビーを折衷したような、無為の逼塞状況に陥った学生の日常を描く次作『眠る男』の多くの部分でも、病的な妄想に由来する執拗な網羅が語りの主要な位置を占める。主人公「おまえ」のカフェでの新聞の読み方は尋常ではない。

おまえはキャッフェの奥に腰をおろし、『ル・モンド』紙を一行一行、順番にきちんと読む……第一ページの見出しを、「その日その日」を、外報記事を、最後のページの雑報を、広告欄を読む。求人、求職、代理店業、商取引、不動産、土地、地所、住居（売）、住居（建築中）、住居（買）、店舗、各種貸建物、営業権、融資、各種協会、各種学校・教授、終身年金收受権、自動車売買、ガレージ、動物売買、出物、それに雑、すなわちレセプション案内、誕生通知、婚約通知、死亡者告知、お礼の挨拶、ドゥルオ館での競売、参観と講話、博士論文公開審査……（66～67ページ）

アルジェリア戦争に際する徴兵忌避を主題とする喜劇調の小品『小さなバイク』（66年）のテキストはロラン・バルトの講義からヒントを得たというあらゆる修辞法を網羅することによって成立している。すなわち物語内容よりも採用された技法の側面での、テキストの裏に潜む列挙の実践である。ちなみに巻末には使用されたあらゆる修辞的技法の一覧表が掲げられている。

いずれも自伝的側面の色濃いいわゆる初期作品にすでに上のような明瞭な枚挙の傾向が窺えるにしても、それはしかし未だ部分的、散発的であり、物語の

流れのいわば澁みのようなものに過ぎない。とはいえ、それらはすでにこの段階で特定の叙法や語り、表現様式、すなわち形式的特性に関っており、次期の趣向新たな作品群への飛躍を充分に予測させるものである。

よく知られているように作家は67年に「^ウ潜^リ在^ボ文学工房」の一員となり、歴代の種々の言語遊戯的手法を援用したテキストを産出する⁽³⁾が、こうして出来た作品も多くの次元で網羅の傾向を孕んでいる。たとえば文字落^{リボグラム}としの技法を用いた、この範疇での代表作『失踪』（69年）では、一度も用いられることのない e の文字、ひいては全般的な欠落、空白を暗示するような事象が幾度にもわたって列挙される。それは冒頭の献辞が暗示するように、戦争で失った両親の不在を象徴する寓意でもある。たとえば絨毯の模様を眺めながら主人公が思い浮かべる形象はつぎのようなものだ。

ちなみにある時はそいつは円く、閉ざしきらず、最後に真横の棒がくる、鏡に映った大きなGの字みたいだった。

あるいはまた白地に白く、鉛を振りかざす王の尊大な肖像が澄んだ霧のなかから浮かびあがるのだった。

あるいは、ほんの一瞬、三本のまっすぐの棒の下に、もひとつはつきりしない、なにやらクロッキーのようなものが姿を現した。想像力を虚しく奔出させつつ、あざ笑うサルドンの三本指の手部をかたどる、際だった代替物、混交した輪郭だ。

あるいは、黒い胸郭にほとんど純白の三本の節をもつ、重そうに飛ぶマルハナバチの形が突如優位を誇った。（p. 19）

あるいはまた、この三年後に公表される、母音字はeしか用いないという、一層強力な制約に支配された『戻ってきた女たち』（72年）ではテレーズとエレーヌに次のような「アントレ」のメニュー（p. 47）が供される。

ENTREES

Les Bègnets de Crevettes
Les Tertelettes de Merle
Les Sterlet's Eggs
Le Jerez en gelée
Les Gerbes d'Ecreveesses
Les Béchémelles des Frères Vernet
Le Mégrèt des Lendes en Crêpe
Les Eperlents en Esclébèche

「ウリボ」の圧倒的な影響下に書かれるテキストでのリストの特性は次のように要約できよう。すなわちそれらは「制約」とよばれるなんらかの形式的な要請に従属した枚挙である。『失踪』の全体は e を含まない語のリストでもあり、逆に『戻ってきた女たち』は e しか含まない語のリストでもある。また作家が長年出題を担当したクロスワード・パズル、記録的な長さを誇る回文、友人に書き送った「年頭の挨拶」など「制約」に基づくこの時期の他のテキストも考慮にいれるならば、これらの作品はさまざまな形式の要請のもとにリストを再編成する可能性を探る一連の習作という側面も含んでいる。そしてそれらの習作においても、おりあるごとに自伝的な要素が姿を見せる。

さてここまでに見たような自伝、言語遊戯という二つの大きな作品傾向を統合しつつ、リストは「思い出」というもうひとつの主題に大きく傾斜してゆく。その最初のまとまった成果は『Wあるいは子供の頃の思い出』（75年）である。これは幼少年時代の思い出と、スポーツ共同体の機構の描写が一章ごとに交差しながら強制収容所の悲痛な喚起にゆきつく自伝的作品であるが、その実質は疎開先での暮らしの微かな思い出の羅列と、空想上の「オリンピック村」の仕組の委細にわたる記述の連続にほかならない。ジュール・ヴェルヌ風の冒険譚の模倣であることが明言されている「W」の前半部分を除いては、物語が後退し、枚挙の傾向が大きく前面に押しだされていることが認められる。「思い出」の代替物にしばしば援用される写真の解説はたとえば (a) 黒い山羊、(b) 伯母、(c) 白い仔山羊、(d) ぼく自身、(e) 雌鳥、(f) 農婦、(g) 馬という被写体に分類され、それぞれに多少とも詳しい描写が加わるもの（第XXI章）であり、また「村」で展開されている競技の類別に関する説明（第XVI章）は次のようなものである。

……十二の競走があり、うち三つが短距離競走（100メートル、200メートル、400メートル）、二つが中距離競走（800メートルと1500メートル）、三つが長距離競走（5000メートル、10000メートル、マラソン）、四つが障害物競走（110メートル・ハードル、200メートル・ハードル、400メートル・ハードル、3000メートル・障害物競走）だ。七つはフィールド競技で、うち三つはジャンプ競技（走り高跳び、走り幅跳び、三段跳び）、四つが投擲競技（砲丸投げ、ハンマー投げ、円盤投げ、槍投げ）である。

これら十九のフィールド競技にいくつかの種目を組み合わせた混合種目の競技二つ、五種競技と十種競技が加わる……

上梓までに5年の歳月を費やしたというこの自伝の試みの時期を境に、枚挙癖はいわば一挙に作品の前面に押し出される。つまり枚挙そのものから全編が成立しているような大小の作品が次々と発表されることになる。リストの祝祭とでもいうべき5年間の『使用法』執筆の後半に並行するのである。たとえば『暗い店』（73年）は「124の夢」という副題が示すように、作家が68年5月以降4年余りにわたって見た夢の記録にはかならない。また『さまざまな空間』（74年）はタイトルが示すように、作家の机上の空間から発して宇宙に至る、あらゆる空間の枚挙である。その「アバルトマン」の項目での「新居に入居すること」（p. 50～51）はたとえば次のような数十の動詞の不定詞の示唆する動作の集積である。

掃除し 確かめ 試し 変え 備えつけ 署名し 待ち 想像し 考えだし 投企し 決断し 展げ 畳み 曲げ くるみ 装備し 剥きだしにし 割り 廻し もとに戻し 打ちぶつぶつ言い 打ち込み 捏ね 方向を決め 防御し シートを掛け やっつけ ひっぺがし 切断し 接続し 隠し 始動させ 起動させ 据え 素人大工をし 糊づけし 壊し 紐で括り 通し 詰め込み 積み重ね アイロンを掛け 磨き 固め 突っ込み ボルトで締め 引っ掛け 並べ 鋸で挽き 固定し ビンで留め マークをつけ ノートし 計算し 鑿じ登り メートルを計り 制御し 眺め 測量し 全量を計り 塗装し 研磨し ペイントを塗り 引っ掻き 削り 繋ぎ 登り よろめき 跨ぎ 失くし みつけだし ひっかき まわし 無駄な仕事をし ブラシを掛け 充填し 飾りを外し 偽装し 穴埋めし……
繰り返し 差し込み 陳列し 洗い 探し 入り 大息をつき
身を落ち着け
住み
暮らすこと

また「はくが1974年中に暴飲暴食した食料・飲料の枚挙の試み」（76年）ではオードヴルからデザートにいたるまで、作家の一年間の飲食物の明細目録が列挙されるが、そのリキュール類に相当する部分（p. 106）にはこうある。

アルマニャック五十六杯、バーボン一杯、カルヴァドス八本、サクランボのブランデー一杯、シャルトルーズ・ヴェルト六杯、シーヴァス一杯、コニャック四杯、ドラマン・コニャック一杯、グラン・マルニエ二杯、ジン・ピンク一杯、アイリッシュ・コーヒー一杯、ジャック・ダニエル一杯、マール四杯、ピュジェのマール三杯、プロヴァンスのマール一杯、ミラベル

一杯、スヤックのブリュヌ九杯、すももの焼酎一杯、ボワール・ウイリアムズ二杯、ボルト一杯、スリヴォウィッツ一杯、スーゼー一杯、ヴォトカ三十六杯、ウイスキー四杯。

公表の時期はやや前後するけれども、小品『バリのある箇所¹の徹底描写の試み』（75年）もこの種のテキストの典型をなす。ここでは好みのカフェに腰を据えた作家がなじみの境界の目に映る人物・事物をまさに徹底してスケッチするのである。1974年10月18日12時40分のサン＝シュルピス広場がそこでは次のように再現されている。

.....

鳩がすべて区役所の樋の上に避難した。
96番が通る。87番が通る。86番が通る。70番が通る。「グルネル・アンテルランジュ」のトラックが通る。

小休止。バス停にだれもいない。

63番が通る。96番が通る。

若い女が絨毯「ラ・ドムール」のギャラリーの正面のベンチに腰をおろして、煙草を喫っている。

カフェの前の歩道にバイクが三台駐輪している。

86番が通る。70番が通る。

車が何台も駐車場に吞み込まれてゆく

..... (p. 20)

さらに『ぼくは思い出す』（78年）では作家が同世代の者たちと共有する5・60年代を中心とした次のような思い出が480項目列挙される。

.....

171 ぼくは思い出す、クエヴァ公爵のパレー団のことを。

172 ぼくは思い出す、スボック博士が米国の大統領候補だったことを。

173 ぼくは思い出す、「世界一速い」女、ジャックリーヌ・オーリオルのことを。

174 ぼくは思い出す、68年5月のことを。

175 ぼくは思い出す、ピアフラのことを。

176 ぼくは思い出す、インド・パキスタン紛争のことを。

177 ぼくは思い出す、ユーリ・ガガーリンのことを。

178 ぼくは思い出す、「ステューディオ・ジャン・コクトー」が以前は「^{セルティック}ケルティカ」と呼ばれていたことを。

.....

*

すでに過剰に違いない以上のようなベレックのリストの実例を通観すれば、作品全体の多様多彩な内容と形式にもかかわらず、網羅・羅列・列挙こそがこの作家の関心の本質に属するものであることが容易に見てとれるだろう。

ところで、ここまでに取り上げた『使用法』以前のリストは空間の観点からすれば一面的（理想の居室、視野に収まる街路、レストランなど）であり、また時間の観点からすれば共時的（想定された一定時間、あるいは時間性の不在など）であり、時代区分が特定できるものでも項目間の時系列関係は無視されている。つまりこれらのリストは無限に延長可能であるとしても、いずれも森羅万象の一面の断片であることを免れず、いずれかのコードに裁断されたある時空の範囲を超えることはできないだろう。

しかしある時点でリストが「動きだす」。組み合わせの概念が導入されることによって、リストの項目同士が相互に関連しあい、リスト自体が複合的、多面的なものに変容するのである。

1969年、作家は特定数の項目を重複することなく、満遍なく組み合わせ配列する方法の教示を乞う手紙をあるインド人の数学者に宛てて書く。胚胎の過程にあった『場所』⁽⁴⁾という奇想の作品の構成方法を解決するためのものであった。この作品は自らが住んだことのある街、友人・親戚などがいたことのある界限、偏愛する小路など、作家ゆかりのパリ市内の12の箇所をあらかじめ選択し、一方でそれらの場所の現況を月に一回現場で描写するとともに、他方で同じ場所に関する思い出をやはり月に一回12年間にわたって書きとめ、それぞれを密封して12年間放置し、しかる後に開封して索引を付し、作品化するというものであった。この12の箇所の12年にわたる思い出と描写の二種、すなわち $12 \times 12 \times 2 = 288$ のテキストの配列を決定するのに用いられたのが上の置換原理（2元12次ラテン方阵⁽⁵⁾）であった。作家自身「タイム・カプセル」と名づけていたこの興味深い構想も、しかしそのあまりに強制的な時間上の制約のゆえに数年後には挫折をきたし、未完の断片のみが残されることになった。上に引いたサン＝シュルピス広場の徹底描写の試みはこの壮大な企てのいわば番外に位置する描写の部分のひとまとまりを一作品として公表したものに他ならない。そして『場所』の着想以後、次々に試みられる「思い出」あるいは「描写」に関する多くのリストは、基本的にこの作品で数年にわ

たって毎月実践された両種のエクリチュールの実践の副産物とでもいうべきものである。

ところで、この挫折したリストの組み合わせの試みが、もうひとつの雄大な作品を産み出すきっかけとなる。もちろん『人生使用法』である。この小説のそもそもの構想は先にも触れたようにパリ市中のある集合住宅の正面壁を一定時間——1975年6月23日夜8時前——に剥がし、そこに観察される人物・事物を網羅しつくそうというものであった。しかしほとんど無限であることが予測されるそれらをどのように描写すればよいのか。ここで援用されたのが、極度に多層化されているとはいえ、原理的には『場所』に用いられたのと同じ「ラテン方陣」である。すなわちまず上のような描写の対象となるであろうような要素と呼ばれる家具、小装飾品、飲食物、形状、色彩、文学・音楽・絵画作品などの事象が21選ばれ、それぞれの要素について10ずつ下位に属する項目が選択されたのち、100の部屋が想定される集合住宅と、それらに対応する小説の100の章に、これらの項目が重複することなく、また欠けることなく配分されることになったのである。したがって小説の各章には原理として各要素が擁する2つの項目が一組にされ、21回分=42項目が、小説の全体では4200項目が言及せねばならない事項としてあらかじめ設定されたのである。たとえば「小物」^{アクセソワール}という要素の下位項目は、「装身具」^{ビジュ}の同数の項目と組み合わせられて100の章に配分された⁽⁶⁾。

小物	装身具
1. 帽子	1. 首飾り
2. ネクタイ、ネッカチーフ	2. 指輪
3. スカーフ	3. プレスレット
4. 手袋	4. ステッキ
5. 靴	5. 眼鏡
6. ハンカチ	6. バッジ、勲章
7. スボンつり	7. 腕時計
8. ベルト	8. ライター
9. パンツ、肌着	9. ハンドバッグ
10. ストッキング、靴下	10. ネクタイピン、ブローチ

換言すれば700ページに及ぶ小説の全体が基本的に上のようなリストの複

合的な使用によって組み立てられたことになる。この項目中にはもちろん「分類」自体も含まれており、冒頭に引用したもののいくつかはこのような方法上の要請に応えるものである。

*

内容と形式の外観上の多様性のゆえに見落としがちなのは、『使用法』以前のこの作家の諸作品がいずれもその主題ごとに時代の支配的イデオロギーに対する批判として成立しているという事実である。『物の時代』は大衆消費社会の、『眠る男』はやがて「68年5月」となって爆発する政治的逼塞状況の、『小さなバイク』はアルジェリア戦争の、そして『Wあるいは子供の頃の思い出』は強制収容所に象徴される第二次世界大戦の、いずれも正面きってではなく、側面からの、屈折した批判である。それらはいずれも作家の個人史を濃厚に反映した自伝的作品であり、とりわけ初期においては、物語の線的な進行を図ろうとの意図が認められる。しかしその場合でもそもそも物語性は希薄である。『W』以前の主要作品に共通する際だった特性は主人公たる青年（達）の、それも主としてパリにおける彷徨であり、出口のない迷路でのそのような彷徨の描写の反復、あるいは同種の所作のリスト化がテキストの主要な内容をなしている。

言語遊戯に則った諸作品は、その作品概念自体において、戦後の文学の主要な潮流への批判を含んでいる。それ自体を抜きで書かれている『失踪』の後書きにも見られるように、これらの作品では靈感、天才、心理主義、プロット、道徳性、良き趣味など、もっぱら消費の対象である既存の文学の主要な道具立てにまっこうから対峙しながら、網羅、飽和、模倣、引用、翻案、自己増殖などの概念を引き連れた「記号の圧倒的優位」に則った作品産出に与する作家の立場が強調されている。

ところでここまでの主要な作品のほとんどが同時に作家の個人史を濃厚に反映したものであることもすでに見たとおりである。しかしながら戦災孤児という幼少年期の境遇に立ち戻ることは巧みに回避されてきた。だが自伝を基礎に

据えた大がかりな物語化を企てようとするなら、いかに悲痛なものであれ、この時期の思い出に探りを入れないわけにはゆかないだろう。そこで試みられたのが『W』の執筆であった。だがそれは作者をかつてなかった苦渋に陥れる。子供の頃の回想を通して改めて思い知らされることになったのはこの時期の思い出のまったき欠如、「ぼくには子供の頃の思い出がない」（11ページ）という認識であった。以来、まさに寝ても覚めてもあらゆる事象のリスト化が試みられるだろう。それはあたかも、森羅万象をリストによってくまなく再現することによって、この思い出の欠如の埋め合わせを図ろうとするかのごとくである。しかしすでに見たように、一元的、単一的なリストは、どれほど延長しても一面的でしかありえない。そもそもこの作家の大半のリストは非歴史的なものであり、したがってそれ自体では物語性にそぐわないのである。そこで発案されたのが、リスト自体を飛躍的に増幅させる方法、組み合わせ、置換原理の導入であった。そして『場所』ではテキストの配列に用いられたこの原理が『人生使用法』ではまさにルーセルなみに物語の構成要素を配分することに用いられたのである。その結果リストはテキストの表面には現れない潜在的なものとなり、時空の拘束を免れるものとなった。ここにおいて初めて事物の現況描写に関する共時性と思い出に関する通時性とが統合されるにいたり、相互に関連する百におよぶ物語群の構築が可能になったのである。

*

大がかりな置換原理の文学テキストへの応用の実現を果たした作家の手練の技の余韻ともいうべき、『使用法』刊行後に執筆された二つのリストを最後に示しておこう。

その最初のものはやはり組み合わせの原理に由来するものである。題して「初心者向け料理カード81枚」（80年）。題名どおりその内容は81種類の異なったレシピを羅列した外観を呈しているが、読み進めるやただちにそれらが基本的に同じ材料を用い、同じ調理法に従うものであることが判明する。すなわち材料は舌平目、ウサギ、仔牛の胸腺肉の三種類でしかなく、調理法は

細部に多少の差異があるとはいえ、基本的には加熱の方法と添えものの材料、味付けとソースの四種類でしかない。すなわち $3^4 = 81$ 枚のカードとなるわけである。組織的な置換原理の傍らで産み出された、数学概念の文学テキストへの「ウリポ」流応用の雛型ともいえるべきものである。

81年、「スティル・ライフ／スタイル・リーフ」と題された短文が公表される。作家の机上の事物を網羅しつつ描写する試みであり、リスト・アップそのものが作品の全体をなすもののもう一つの例にほかならない。すでに5年前に同様の試みがなされている⁽⁷⁾が、この「静物画」は次のような点でその前作と決定的に異なる。すなわちここでは「ぼくが書きものをしている机は宝石細工職人が使っていた古い机で……」に始まって筆記具、小物など、机上のあらゆる事物にひとわり目が配られたのちに、描写は「過度に目の詰んだ文字にほとんど完全に覆われた」罫線入りの一枚の紙葉に行き着く。そしてこの瞬間からそれまでの描写がほぼそのまま反復される。つまりその原稿はまさにそこまでの描写が書きつけられたばかりのものであり、後半はその原稿用紙上の再現なのである。しかしこの反復は完全な反復ではなく、微妙な差異を含む反復である⁽⁸⁾。たとえば前半の **BOETIE** という語を想起させる、計算器に記された **315308** という数字は後半では **GLOSE** を思わせる **35079** であり、また前半では薄いグレーの同じ陶器製の鉢が後半ではクリーム色がかった白に変じる。さらに時計は前半では午前10時18分を、後半では午後12時30分を指している。これらの差異は、執筆に要した2時間あまりの時間の隔たりの結果同じ事物が別様に見えるという事実を示しているのである。「静物画」にいわば動画の性質が付与されたと言えよう。後半の反復の末に、同じ形式の三つ目の連を、さらにその末に n 番目の連を反復することができるだろう。いくつかの作品に跨がって姿を見せるこの鏡像概念は、限定されたリストの時空を無限に向かって解放する役割、すなわちリストの重層化を図るもうひとつの手法という役割を担っている⁽⁹⁾。

最後に本号の主旨に沿って、また本論の主題にあやかって、筆者の院生のころに授かったご薫陶に関する作家名を枚挙することでご退官へのオマージュとさせていただきます。

Georges Bataille, André Breton, Jean-Pierre Brisset, Michel Butor, Louis-Ferdinand Céline, Georges Darien, Alfred Jarry, Michel Leiris, Raymond Queneau, Restif de La Bretonne, Jules Verne...

いまだ成果乏しくともルーセル、ペレックへの筆者の以後の関心は、なんといってもこれらの作家たちのテキストの交錯の延長上に位置するのであるから。

list but not least⁽¹⁰⁾。

〈使用テキスト〉

Les Choses, Julliard, Paris, 1965. 『物の時代』、弓削三男訳、白水社、1978年。

Quel petit vélo à guidon chromé au fond de la cour? Denoël, Paris, 1966. 『小さなバイク』、弓削三男訳、白水社、1978年（上記と合本）。

Un homme qui dort, Denoël, Paris, 1967. 『眠る男』、海老坂武訳、晶文社、1970年。

La disparition, Denoël, Paris, 1969.

Les Revenentes, Julliard, Paris, 1972.

La Boutique obscure (124 rêves), Denoël-Gonthier, Paris, 1973.

Espèces d'espaces, Galilée, Paris, 1974.

W ou le souvenir d'enfance, Denoël, Paris, 1975. 『Wあるいは子供の頃の思い出』、拙訳、人文書院、1995年。

Tentative d'épuisement d'un lieu parisien, 1975, réédité par Christian Bourgois, Paris, 1986.

Tentative d'inventaire des aliments liquides et solides que j'ai ingurgités au cours de l'année mil neuf cent soixante-quatorze, 1976, repris dans *L'infra-ordinaire*, Seuil, Paris, 1989.

Je me souviens, Hachette, Paris, 1978.

La Vie mode d'emploi, Hachette, Paris, 1978. 『人生使用法』、拙訳、水声社、1992年。

81 fiches-cuisine à l'usage des débutants, 1980, repris dans *Penser/Classer*, Hachette, Paris, 1985.

Still life/style leaf, 1981, repris dans *L'infra-ordinaire*, Seuil, Paris, 1989.

Penser/Classer, Hachette, Paris, 1985.

○本論中の引用は既刊の翻訳の存在するものについては、その訳書から引かれ、ページ番号も訳書のそれに照合している。なお横書の要請上一部表記を変更したものがある。

〈註〉

- (1) *Lettre à Maurice Nadeau* du 7 juillet 1969, publiée intégralement dans *Je suis né*, Seuil, Paris, 1990.
- (2) *Notes concernant les objets qui sont sur ma table de travail*, 1976, repris dans *Penser/Classer*, p.21-22.
- (3) 「ウリボ」ならびにそこでのベレックの活動の詳細については特集「風の薔薇5——ウリボの言語遊戯」、書肆風の薔薇、1991年を参照されたい。
- (4) 「場所」に関する記述は基本的に Philippe Lejeune : *La Mémoire et l'oblique*, Hachette, Paris, 1991.pp.139-209. に依拠している。なお註(1)の「モーリス・ナドールへの手紙」にもこの作品の概要についての作家自身の解説がある。
- (5) 「ラテン方陣」については Georges Perec : «Quatre figures pour La Vie mode d'emploi» in *L'Arc* n° 76, 1979. に詳しい説明がある。
- (6) この置換された要素および項目に関する詳細については作者の創作ノートの再現である *Cahier des charges de La Vie mode d'emploi*, Georges Perec», CNRS Edition, Paris, 1993. を参照されたい。
- (7) *Notes concernant les objets qui sont sur ma table de travail*, 註(2)を参照。
- (8) Bernard Magné : «Bout à bout tabou : About Still Life/Style Leaf» in *Parcours PEREC*, Presses Universitaires de Lyon, 1990. はこの二つの描写の相違を対象にした専攻論文である。
- (9) この鏡像概念は他の多くの作品にも繰り返し採用されるが、とりわけ「人生使用法」の序章に現れる「ジグソー・パズル論」の、第44章におけるほとんど完全な反復はこのテキストと類似した機能を果たしている。また回文も原理的に文の中央に鏡を立てたような、同じ文字あるいは音声の反復である。
- (10) この連辞は「人生使用法」のリストに関する Bernard Magné の研究論文 «Le cahier des charges de La Vie mode d'emploi» dans *Penser, classer, écrire*, Presses Universitaires de Vincennes, 1990. 中の項目題 *Last but not «liste»* にあやかっている。

(甲南女子大学文学部教授)